

## ポスト・グプタ朝時代における四臂観音について

橋村 愛子

人間社会環境研究科 博士後期課程3年

### はじめに

筆者は、金沢大学大学院人間社会環境学研究科の文化資源学フィールド・マネジャー養成プログラムの助成を受け、平成24年12月29日（土）から翌年1月20日（日）までの23日間、ニューデリー国立博物館、アジャンター石窟、エローラ石窟、アウランガバード石窟などにおいて実地調査を行った。申請時の研究テーマは「西インド・東インド地方における密教の尊像と説話表現」としたが、日程や現地との調整面から、調査対象を西インドの後期石窟に絞ることとした。結果として、東インドよりも先行して仏教タントリズムが造形化したデカン地方について美術史的な見解からも新たな視座が得られることとなった。また密教というカテゴリーではなく、ヒンドゥー教シャクティズムやタントリズムなど民間信仰的な影響から、それまでの仏教にはみられない造形が誕生したのではないかと認識を新たにされた。本稿では、ひとまず中間報告として、ダラニ信仰の最初期的な造形である、四臂の観音菩薩についての分析を記したい。

大乘仏教の“ほとけ”として、菩薩のなかでもとくに重要な役割を担った菩薩が、観音菩薩である。観音菩薩は、仏教パネオンにおけるそのほかの尊格と比べて、作例数に秀でるばかりでなく、いわゆる変化観音と呼ばれるバリエーションがひととき豊富であり、作域の優れた制作期の古いものが多い。そのためもあり、観音の図像についてはその成立と展開をめぐって、諸先学によって研究が重ねられている。なかでも宮治昭氏による指摘は重要であろう。

「観音ははじめからそのイメージを有していたのではなく、具体的な造形をしだいに形成し、ダラニ信仰の影響から多面多臂化を増強させ、図像を形づくってきたのである。」<sup>1)</sup>

小乗および大乘の仏教にはぐくまれたダラニ信仰は、その宗教行為において単にダラニを唱えるだけでなく、ここに本尊の具体的なイメージを思い浮かべる必要があることから、尊像を造形するうえでも根幹的な動機となったことは疑いない。おそらくそうした背景から、ポスト・グプタ朝時代からパーラ朝にかけて四臂以上の多臂の観音像が数多く制作されており、四臂観音の図像の成立はポスト・グプタ朝時代とみなされている。宮治氏や佐久間留理子氏は、とくにパーラ朝の四臂観音の印相・持物を検討し、伝統的な与願印・持蓮華のほか、持物として数珠と水瓶をとる手が加わって、四臂の図像が形成されたと、結論付けられた<sup>2)</sup>。しかし、ポスト・グプタ朝時代の四臂観音が制作されたエローラ石窟およびアウランガバード石窟、カーンヘリー石窟において、どのような二臂の観音図像が伝統的であったかについては、いくぶん吟味の余地があるのではなかろうか。

一方で、ポスト・グプタ朝時代以前に遡りうるインドの明確な観音菩薩像は、存外限られていることも事実である。先にふれた宮治氏による諸論のほか、本稿では、アジャンター石窟における観音菩薩の造例を博搜された島田明氏<sup>3)</sup>、西インドの後期石窟における観音諸難救済図を検討された福山泰子氏<sup>4)</sup>、インド後期密教のテキストから観音図像の密教的バリエーションを分析された佐久間氏<sup>5)</sup>による論考が注目される。観音菩薩という尊名同定を明らかにしづらいのは、この時期、大乘仏教の興隆とともに、多数の菩薩が仏教パネオンに登場したものの、尊像イメージについては具体的な表現を固定化するにいたっていなかったためと想定されている<sup>6)</sup>。

そこで本稿では、このたびの文化資源学フィールド・マネジャー養成プログラム助成によって実施したアジャンター石窟、エローラ石窟およびアウランガバード石窟での調査成果にもとづき、西インドのポスト・グプタ朝時代における四臂観音と、その基盤となった二

表1 ポスト・グプタ朝時代の四臂観音の図像

石窟名	建築場所	観音菩薩			対尊となる菩薩			備考
		服制	右手	左手	服制	右手	左手	
エローラ石窟第8窟	祠堂	行者風化仏	与願印 施無畏印+念珠	垂下して蓮莖 あげて払子	王者風	あげて払子	垂下して腰帯	※脇侍（観音は左側） ※四臂
アウランガバード石窟第9窟	前庭	行者風化仏鹿皮	施無畏印+念珠 与願印	あげて（払子） 垂下して蓮莖	王者風	あげて（欠損）	垂下して（欠損）	※守門神（観音は左側） ※四臂
カーンヘリー石窟第41窟	祠堂	王者風十一面	施無畏印+念珠 （与願印）	垂下して蓮莖 垂下して（欠損）	王者風	あげて払子	垂下して腰帯	

臂観音の伝統的図像について分析し、思想的背景としてのダラニ信仰の一端を考察したい。

## 1. ポスト・グプタ朝時代における四臂観音

これまでに報告されているとおり、ポスト・グプタ朝時代における四臂観音の作例は次の三例である（表1もあわせてご覧いただきたい。）。以下で尊像について述べる場合には、尊像からみて右左の別を記した（たとえば右手、右脇侍など）。ただし建築場所については、建築に正対しての左右とした（たとえば右祠堂、右翼など）。腕の呼称については、各側手前の腕を第1手とし、奥の腕を第2手とした。

### ・カーンヘリー石窟第四一窟 十一面四臂観音立像(右脇侍)

服 制：耳環、首飾り、腰飾り、腕釧、臂釧、条帛、十一面

右第1手：施無畏印に数珠をかける

右第2手：垂下して与願印？（手先欠損）

左第1手：垂下して大地から生じる未敷蓮華の莖

左第2手：垂下（手先欠損）

年 代：五世紀末～六世紀<sup>7)</sup>

### ・アウランガバード石窟第九窟 四臂観音立像

服 制：髪髻冠、化仏、鹿皮

右第1手：施無畏印に数珠をかける

右第2手：垂下して与願印？（手先欠損）

左第1手：垂下して大地から生じる未敷蓮華の莖

左第2手：あげて払子（手先欠損）

年 代：五世紀末～六世紀半ば<sup>8)</sup>

### ・エローラ石窟第八窟 四臂観音立像（右脇侍）

服 制：髪髻冠、化仏、聖紐、鹿皮

右第1手：垂下して与願印

右第2手：施無畏印に数珠をかける

左第1手：垂下して大地から生じる未敷蓮華の莖

左第2手：あげて払子

年 代：六世紀～七世紀<sup>9)</sup>

このように、現地にて子細に観察した結果、いくつかの持物が判明した。

アウランガバード石窟の四臂観音の左第二手については、手首より先を欠損しているため、これまで不明とされていた<sup>10)</sup>。しかし残存部分の腕は、明らかに胸前にあげている。また、蓮華つぼみの尊周辺から手前にかけて、紐状の形態が残るため、持物は払子と判断され、かの手が屈臂して払子を執っていたと推定できた（図1）。また、エローラ石窟の四臂観音の左第二手については、先行研究では「経函？」とされていたが<sup>11)</sup>、柄の短い払子であることが確認された（図2）。カーンヘリー石窟の十一面四臂観音は、複数の

図1 アウランガバード石窟第九窟 前庭 四臂観音立像

つである。これも三例すべてに共通する。のこる左の一手は、胸前にあげて払子を執る例が、エローラ石窟とアウランガバード石窟に共通している。なおカーンヘリー石窟では、蓮華を執らない方の腕を垂下させており、払子とは異なる持物であったと想像される。

よって、ポスト・グプタ朝時代における四臂観音の持物・印相は、右の二手を与願印、そして施無畏印に数珠とし、左の二手を垂下して大地から生じる蓮華、また払子をかかげるもの特徴としたのではないかと推測される。そうしてみると、成立期の四臂観音からうかがえる伝統的な持物・印相とは、間違いなく左手を垂下して蓮華をもつものである。のこる右手は、与願印ないしは施無畏印に数珠のどちらかであったであろう。

ところで、カーンヘリー石窟の十一面四臂観音の服制は、豪華な装身具を身に付けたものとなっており、化仏はなく十一面とする点など、エローラ石窟およびアウランガバード石窟の四臂観音と、違った制作背景をうかがわせる。しかしこれら三例は、いずれも石窟の主たる礼拝対象である中尊に対して、右側に配置されている。とくにエローラ石窟では中尊からみて右側が行者風（苦行者風／聖者風）、左側が王者風（戦士風）と、服制の特徴が、つまるところ尊像の性格が固定されている。アウランガバード石窟では、いまだ配置の左右による性格は厳密ではないものの、服制の差異による対比は、脇侍となる二菩薩や対になる守門神の間で意図的に施されていたようである（表2として脇侍像、守門神像の図像をまとめたため、適宜ご参照いた

図2 エローラ石窟第八窟 祠堂 四臂観音立像

図版資料とそれにつまわる記述を検討した結果、右第二手の持物を「水瓶」とみなす根拠に足りないこと<sup>12)</sup>、腕は垂下させていることが分かった。

さて、これら三例における四臂の持物・印相について比較すると、どの腕を手前に、また奥に配置するかについては差異があるものの、右手にとる特徴、左手にとる特徴は、ほとんど固定的であり、特筆される。

まず右手の持物・印相については、片方が与願印、もう片方は施無畏印に数珠を手のひらにかけている。これは三例すべてに共通する。

左の一手は、垂下して大地から生じる蓮華の茎をとる。蓮華は未敷蓮華であり、花（つぼみ）の数はひと

表2 アウランガバード石窟の脇侍菩薩・守門神の図像

石窟名	建築場所	本尊（建築場所）	右脇侍			左脇侍			備考
			服制	右手	左手	服制	右手	左手	
第2窟	広間	説法印仏陀倚像（祠堂）	王者風	化仏のせた蓮華	垂下して腰帯	行者風	垂下して絹索	化仏のせた蓮華	※祠堂内に脇侍菩薩なし
第3窟	祠堂	説法印仏陀倚像	王者風化仏	あげて払子	垂下して腰帯	王者風	あげて払子	垂下して腰帯	
無番窟	祠堂	説法印仏陀倚像	股間の衣の袈臂釧	あける	垂下	?	?	?	
第5窟	祠堂	定印仏陀坐像	行者風鹿皮塔	あげて払子	垂下して腰帯	王者風	あげて払子	垂下して金剛杵	
第6窟	祠堂	説法印仏陀倚像	王者風	あげて払子	垂下して腰帯	行者風鹿皮化仏	あげて払子	垂下して蓮茎	
第6窟	広間	✓	王者風	あける	垂下して腰帯	王者風	あける	垂下して金剛杵	※守門神
第6窟	後廊左	定印仏陀坐像（左小祠堂）	行者風塔	垂下して腰帯	あげて折枝	王者風	あげて折枝	垂下して三鈷杵	
第6窟	後廊右	説法印仏陀坐像（右小祠堂）	王者風	垂下して腰帯	あげて折枝	王者風	あげて折枝	垂下して三鈷杵	
第7窟	広間	説法印仏陀倚像（祠堂）	行者風化仏	施無畏印+念珠	垂下して蓮華	王者風	あける	垂下して腰帯	※祠堂内に脇侍菩薩なし
第7窟	後廊左	説法印仏陀倚像（左小祠堂）	王者風	あげて払子	垂下して腰帯	行者風塔	あげて払子	垂下して蓮茎	
第7窟	後廊右	説法印仏陀倚像（右小祠堂）	行者風	あげて払子	垂下して蓮華	王者風	あげて払子	垂下して腰帯	
第9窟	広間	仏陀像（祠堂）	ナーガ王者風	あける	垂下して腰帯	ナーガ王者風	あける	垂下して腰帯	
第9窟	左広間	説法印仏陀倚像（左小祠堂）	王者風	あける	垂下して腰帯	行者風	垂下	あげて折枝	
第9窟	右広間	説法印仏陀倚像（右小祠堂）	ヤクシャ輪王坐	果実	膝の上	ヤクシャ輪王坐	果実	膝の上	
第9窟	前庭	✓	行者風鹿皮化仏	施無畏印念珠 与願印	あげて（払子） 垂下して蓮華	王者風	あける？	垂下？	※守門神

だきたい。)

そうしてみると服制に関しても、四臂観音の図像の基盤には、髪髻冠に化仏を戴き、装身具を身につけず、鹿皮をまとう「行者風」の姿があった可能性が高い。

またアウランガバード石窟の脇侍像、守門神像において確認される通り、垂下して蓮華をとる手の反対の腕には、払子をかかげる作例が多いことも特徴である。

## 2. ポスト・グプタ朝時代における伝統的な二臂観音

前項までの分析により、四臂観音に先行した伝統的な二臂観音の図像とは、服制を行者風としたもので、右手は与願印ないしは施無畏印に数珠をかけるかのどちらかで、左手は垂下して蓮華をもつである、と推定した。このことを言い換えれば、基本となった観音図像は、右手を与願印・左手を垂下して大地から生える蓮華とするか、あるいは右手を施無畏印に数珠・左手を垂下して大地から生える蓮華とするかの、どちらかの組み合わせである、と言える。

まず、左手を垂下して蓮華の茎をとることは共通しており、反対手も垂下させて余願印をとるとする作例は、けだしエローラ石窟第一〇・一一・一二窟という八～九世紀頃に下る石窟にうかがわれた。

そこで先行するアジャンター石窟においても、観音菩薩像であることが明らかな作例を検討するため、観音諸難救済図(全一〇作例)から観音の図像を分析したいと思う(以下、表3を適宜ご覧いただきたい)。これら作例を検討した先行研究では<sup>13)</sup>、観音諸難救済図における観音図像の特徴として、正面観で直立す

ることや、髪髻冠で、頭飾などはつけず、また装身具を一切つけず、上半身は裸形かもしくは鹿皮をかけることなどが、指摘されている。筆者もこれに賛同したく、とくにポスト・グプタ朝時代の四臂観音とも共通して、服制をいわゆる行者風とする特徴により注視される。福山氏は、「イメージとしては初期の釈迦の脇侍図像が帝釈天と梵天であったように、ここでも観音のイメージが梵天のそれを残しているとも考えられる」と言及する<sup>14)</sup>。アジャンター石窟における観音の図像が、クシャーナ朝における仏三尊像の伝統(弥勒菩薩=行者風、観音菩薩=王者風)を逆転しているだけに、この指摘から、アジャンター石窟の観音図像における恣意的な転換がほのめかされるように感じられる。

また「持物は蓮華、数珠、水瓶などを執るが、その組み合わせはさまざまで定型を得ておらぬとの分析に関心をひかれた<sup>15)</sup>。そこでこれら観音諸難救済図から(表3)、右手を与願印とする作例をみると二例(第一七・二〇窟)あり、左手の持物はどちらも水瓶であった。反対に、右手を施無畏印に数珠とするものは三例(いずれも第二六窟)、施無畏印のみとするものも三例(第二・四・二六窟)あり、この場合には左手を垂下させて蓮華か水瓶(または両方)を持物とすることが示された。したがって、ばらばらに、観音の持物として蓮華、数珠、水瓶が発現するのではなく、左右手の組み合わせとして相関性があることは明らかである。

このほか島田氏は、アジャンター石窟における単独像、脇侍像としての観音菩薩の図像を検討されており、右手印相を数珠をかけた施無畏印(または施無畏印の

表3 アジャンター石窟の観音諸難救済図にみる二臂観音の図像

石窟名	建築場所	観音菩薩		
		服制	右手	左手
アジャンター第2窟	仏殿左前壁	行者風	施無畏印の変形	垂下して水瓶
アジャンター第4窟	ヴェランダ右後壁	行者風	施無畏印?	垂下して蓮茎
アジャンター石窟無番窟	小祠堂右側壁	?	?	蓮茎
アジャンター石窟第1窟	ヴェランダ左側壁	?	?	蓮茎
アジャンター石窟第17窟	ヴェランダ左前壁	行者風鹿皮	垂下して(余願印?)	垂下して水瓶+数珠
アジャンター石窟第20窟	ヴェランダ右端	?	与願印	垂下して水瓶
アジャンター石窟第26窟	前庭右翼上段	行者風鹿皮	施無畏印?	垂下して蓮茎
アジャンター石窟第26窟	前庭右翼下段	行者風	施無畏印+数珠	垂下して蓮茎+水瓶
アジャンター石窟第26窟	大チャイティヤアーチ内部腰壁中央	行者風化仏	施無畏印+数珠	垂下して蓮茎+水瓶
アジャンター石窟第26窟	左列柱上部長押	行者風	施無畏印(+数珠?)	垂下して水瓶

大層興味深い。

本項の最後に、エローラ石窟における観音図像を検討すると、表4にかかげたとおり、右手を施無畏印・左手を垂下して大地から生じた蓮華とする作例が、全一四例みいだせた。このうち右手の施無畏印に数珠をかける作例が、四例含まれる。服制を行者風とする点も共通している。また、対尊がある場合にはそれを王者風とし、観音が本尊からみて右側、対尊は左側に配置される点も、共通している。

たとえば、エローラ石窟第八窟広間奥壁の右守門神は、直立した正面観であらわされており、髪髻冠に化仏をつけ、左肩に鹿皮をかけた行者風の服制で、右手をあげて施無畏印とし、左手を垂下して大地から生じる未敷蓮華の茎をもつ（図4）。また対尊は三曲法の姿態をとり、豪華な装身具を身につける王者風の服制で、右手を肩にあげて何か小さなものを握りこみ、左手を垂下して腰帯に置く。一方、エローラ石窟第四窟祠堂前室の左壁に表された観音菩薩は、堂々とした倚像で、髪髻冠に化仏をつけ、左肩に鹿皮をかける行者風の服制をまとう。その右手は肩にあげて施無畏印とし、手のひらに数珠をかける。左手は垂下して膝前で未敷蓮華の茎をとる（図5）。

これらは、いずれもエローラ石窟でも開窟時期の早い第二～九窟における造形であり、アジャンター石窟およびアウランガバード石窟の伝統をひき、図像を整理・固定化した結果と考えられる。なお、このうちの二例は、第三窟左翼小祠堂や第四窟右翼小祠堂の観音

図3 アウランガバード石窟第七窟 前庭 観音諸難救済図

み)、左手持物を蓮華とする観音菩薩を数多く明らかにされている<sup>16)</sup>。詳しくは同氏の論文をご参照願いたい。

つづいて五世紀末から六世紀にかけて制作されたアウランガバード石窟においては、右手を念珠をかけた施無畏印・左手を垂下して大地から生じた蓮華とする観音立像が一例（第七窟）存在する（図3）。右守門神として配置された観音諸難救済図である（表2をご参照されたい）。五世紀末、アジャンター石窟を放棄した石工が、アウランガバード石窟の制作をはじめたとみられており<sup>17)</sup>、両者における観音図像の類似は

表4 エローラ石窟・アウランガバード石窟の施無畏印と蓮華をとる観音の図像

石窟名	建築場所	観音菩薩			対尊となる菩薩			備考
		服制	右手	左手	服制	右手	左手	
エローラ石窟第2窟	広間右窓枠	行者風	施無畏印	垂下して蓮茎				
	広間手前右壁	行者風	施無畏印	垂下して蓮茎				
	広間手前左壁1	行者風	施無畏印	垂下して蓮茎				
	広間手前左壁2	行者風	施無畏印(+念珠?)	垂下して蓮茎				
エローラ石窟第3窟	広間左窓枠	行者風	施無畏印	垂下して蓮茎				
	広間奥壁	行者風化仏	施無畏印	垂下して蓮茎	王者風	あげて花の折枝	垂下して腰帯	※守門神（観音は左側）
	左翼小祠堂	行者風	施無畏印	垂下して蓮茎				※諸難救済
エローラ石窟第4窟	祠堂前室左壁	行者風鹿皮	施無畏印+念珠	垂下して蓮茎				※倚像
	右翼小祠堂	行者風拳身光	施無畏印	垂下して蓮茎				※諸難救済
	左翼小祠堂	行者風化仏	施無畏印	垂下して蓮茎				
エローラ石窟第8窟	祠堂	行者風化仏	与願印 施無畏印+念珠	垂下して蓮茎 あげて扨子	王者風	あげて扨子	垂下して腰帯	※脇侍（観音は左側） ※四臂
	広間	行者風化仏鹿皮	施無畏印+念珠	垂下して蓮茎	王者風	あげて握りこむ	垂下して腰帯	
	左翼祠堂	行者風化仏	施無畏印	垂下して蓮茎+水瓶				
エローラ石窟第9窟	祠堂	行者風化仏	施無畏印+念珠	垂下して蓮茎	王者風	あげて扨子	垂下して腰帯	※脇侍（観音は左側）
アウランガバード石窟第7窟	広間	行者風化仏	施無畏印+念珠	垂下して蓮茎	王者風	あげて（欠損）	垂下して腰帯	※諸難救済かつ守門神（観音は左側）
アウランガバード石窟第9窟	前庭	行者風化仏鹿皮	施無畏印+念珠 与願印	あげて（扨子） 垂下して蓮茎	王者風	あげて（欠損）	垂下して（欠損）	※守門神（観音は左側） ※四臂

図4 エローラ石窟第八窟 広間 二臂観音立像

図5 エローラ石窟第四窟 前室 二臂観音倚像

図6 エローラ石窟第四窟 右翼小祠堂右壁 観音諸難救濟図

図7 エローラ石窟第二窟 広間前壁 観音像・女性尊格像

諸難救濟図におけるものである（図6）。

ところで、このような図像的特徴をもつ二臂の観音立像は、しばしばその観音と同様の持物・印相をとる特定の女性尊格をともなう。頭光を負い、髪を髮髻冠に結び、首飾りや腕釧・臂釧などの装身具を身につけない簡素な服制で、右手を施無畏印（または施無畏印に数珠をかける）、左手を垂下させて大地から生じる蓮華の茎をもつ女性の姿である。本稿では紙幅の都合から割愛せざるを得ないが、今回の実地調査の結果、エローラ石窟第二窟～第九窟において九例（図7）、アジャンター石窟において一例の、全一〇作例を確認することができた。詳しくは別稿に期したいが、四臂

観音の原形となった伝統的な観音像の制作が、女性尊格の造形化とも軌を一にしている点で、注目されよう。

反対に、先にも述べたとおりエローラ石窟第一～九窟においては、右手を与願印・左手を持蓮華とするどのような菩薩像もうかがわれなかった。アウランガバード石窟でも同様である。それがエローラ石窟第一〇～一二窟において、作例が表現されるようになるのは、新たな潮流とみなせる。

したがって、四臂観音の図像をはぐくむこととなった伝統的な二臂観音の図像とは、右手をあげて施無畏印（に数珠をかける）をむすび・左手を垂下して大地から生じた蓮華をとるものであったと、結論づけるこ

とが可能なのではなからうか。

## おわりに

インドにおけるダラニ信仰や仏教タントリズムに刺激をうけ、ポスト・グプタ朝時代において、まず四臂の観音像が成立した。その図像の形成にあたっては、従来に推定されていた与願印・蓮華に数珠・水瓶がつけ加わったのではなく、施無畏印（または施無畏印に数珠をかける）・蓮華（垂下して茎をもつ）を印相・持物とする伝統的な二臂に、与願印・拏子が加わったという経緯が明らかになった。

先学で想定されていた、新たな持物としての数珠・水瓶は、宮治氏が繰り返し指摘するように、もとよりグプタ朝サールナートにおいて行者的性格を有していた弥勒菩薩から、服制や性格そのものとともに奪取された特徴かもしれない<sup>18)</sup>。あるいは同氏による、ヒンドゥー教のブラフマーの図像的特徴の摂取であるとの指摘も、正鵠を射ていよう<sup>19)</sup>。

けれども実際に作例を検討した結果では、つけ加わった印相・持物は与願印と拏子なのである。拏子については、これまでもアジャンター石窟における観音菩薩の持物として言及されたことはあるものの、特定の尊名と結びつく持物ではなく、ニュートラルな指標として認識されていた<sup>20)</sup>。アウランガバード石窟においても観音の持物として、拏子が登場している（表2をご参照のこと）。拏子の役割は、右手に持って振り動かすことにより虫などをおいはらうもので、聖者の侍者としての指標でもある。これらから勘案すると、四臂の観音図像として伝統的な二臂をもとに、聖者や苦行者を象徴する復古的な持物としての拏子、それに新たな印相としての与願印が付け加えられた、とみなすことが妥当なように思われる。

おそらくはその背景として、隆起した仏教タントリズムないしダラニ信仰において、それまでの伝統的な二臂の観音像では表現に不足があり、観音菩薩にことさら聖者的・苦行者的性格を演出する必要が生じていたものと推測される。行者的な特質は、菩薩のもつ二面性のうち「下化衆生」と結びつく性格であり<sup>21)</sup>、在家の信者たちが悟りをもとめるうえでの困難を解消する功德へ、期待があいまったものであろう。『法華経』「普門品」<sup>22)</sup>などに説かれる観音諸難救済もまた、こうした日常生活における諸難場面で観音を念じ（偈文）、もしくは名を唱えることにより（散文）、在家・

出家にかかわらず信者が済度されることを説いており、称名から観想への儀礼的深化がうかがわれる。多面多臂化が仏教パンテオンにおいて、まずは観音菩薩からはじめられた理由も、またアジア各地において変化観音の造形が興起した理由も、このあたりに求められそうである。

## 謝辞

アジャンター石窟およびエローラ石窟の調査に際しましては、本学准教授の矢口直道先生よりご高配を賜りました。またファルダプール村滞在中には、ミシガン大学教授のウォルター・スピंक博士よりご指導を賜りました。末筆ながら、ここに記して感謝申し上げます。

## 註

- 1) 宮治 2002
- 2) 宮治 2001、宮治 2004、佐久間 2001
- 3) 島田 1998
- 4) 福山 2002
- 5) 佐久間 2011
- 6) たとえば島田 1998 では、次のように言及する。「もちろん各尊の重要な図像的特徴についての大まかな共通認識はあったはずである。しかしそれは観音は苦行者（ブラフマー）を、その対尊菩薩は王者（インドラ）を原形イメージとし、それにいくつかの特徴的な持物を付加するといったようなきわめて緩やかなものにすぎず、しかもそれを大きく逸脱しない限り、細部の図像については様々な表現が許される余地があったのではないと思われる。」
- 7) カーンヘリー石窟には五世紀頃の書体による銘文があり、西暦 494 年にあたるとみられる年附が記された銅版銘文が出土している。静谷 1979
- 8) アウランガバード石窟の造営年代については、次の文献にもとづく。野々垣 1994、Spink 2010
- 9) エローラ石窟の造営年代は、野々垣 1996 に従った。
- 10) シルクロード学研究センター 2001 「Ⅱ. リスト編」1-2-8-1
- 11) シルクロード学研究センター 2001 「Ⅱ. リスト編」1-2-8-2
- 12) シルクロード学研究センター 2001 「Ⅱ. リスト編」1-2-1-1。また写真図版は同書の図 23-1 および図 23-2、頼富・下泉 1994 の 100 頁、森 2001 の図 5-4、宮治 2004 の図 54、佐久間 2011 の図 7-1 および図 7-2 を参照した。
- 13) 山田 1979、島田 1998、福山 2002
- 14) 福山 2002。この特徴について『法華経』「普門品」における梵王身を示唆されておられるが、いわゆる「三十三応身」では梵王（ブラフマー）だけでなく、帝釈（シャクラ）、自在天（マヘーシュヴァラ）、執金剛神（ヴァジュラ＝パーニ）などの姿で観音菩薩が法を説くと記されることから、典拠としては矛盾するように思われる。

- 15) 福山 2002
- 16) 島田 1998。追刻の問題などもあり一概には論じられないものの、石窟の年代観と合わせ、諸難救済図および単独像にみる左手持物の傾向をかながみとみると、第六窟二階や第二六窟などの晩期に造営された石窟では蓮華、それらよりも先行する第九・一〇・一一・一五窟では水瓶をとるといふ大まかな傾向がうかがわれるようである。
- 17) Spink 2011
- 18) 宮治 2001
- 19) 宮治 2004
- 20) 島田 1998
- 21) 宮治 1992、宮治 2004
- 22) 坂本・岩本 1967、辛島 1997、辛島 1999

#### 【主要参考文献】

- Gupte, Remash Shankar, *The Iconography of the Buddhist Sculptures of Ellora*, Matath-wada University, 1964
- Malandra, Geri Hockfield, *Unfolding a Mandala: The Buddhist Cave Temples at Ellora*, State University of New York Press, 1993
- Spink, Walter M., *AJANTA: A Brief History and Guide*, University of Michigan, rep.
- Spink, Walter M., *Ajanta: History and Development volume Five, Cave by Cave*, Leiden-Boston, 2007
- Spink, Walter M., *Ajanta: History and Development volume Four*, Leiden-Boston, 2010
- 辛島静志「法華経の文献学的研究(二) 観音 Avakokitasvara の語義解釈」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』2、1999年
- 辛島静志「初期大乘仏典の文献学的研究への新しい視点」『仏教研究』26、1997年
- 坂本幸男・岩本裕『法華経(下)』岩波書店、1967年
- 佐久間留理子「第2章 インドにおける変化観音」『観音菩薩像の成立と展開(シルクロード学研究 vol.11)』シルクロード学研究センター、2001年
- 佐久間留理子『インド密教の観自在研究』山喜房、2011年
- 静谷正雄『インド仏教碑銘目録』平楽寺書店、1979年
- 島田明「アジャンターの菩薩図像—観音、弥勒像を中心に—」『仏教芸術』237号、1998年3月
- シルクロード学研究センター編『観音菩薩像の成立と展開(シルクロード学研究 vol.11)』シルクロード学研究センター、2001年
- 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究1』平楽寺書店、1996年
- 野々垣篤「アウランガバード仏教石窟の柱のデザインと位置」『学術講演便概集 E 都市計画、建築経済・住宅問題、建築歴史・意匠』1994、1994年7月
- 平岡三保子「アジャンター後期石窟寺院の入口装飾について」『名古屋大学美学美術史研究論集』4、1986年
- 平岡三保子「西インドの石窟寺院」『世界美術大全集 東洋編 第13巻 インド(1)』小学館、2000年
- 福山泰子「アジャンター石窟における観音諸難救済図」『名古屋

- 屋大学博物館報告』第18号、2002年
- 宮治昭『インド美術史』吉川弘文館、1981年
- 宮治昭『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館、1992年
- 宮治昭編『インドから中国への仏教美術の伝播と展開に関する研究』(平成10～12年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書)、2001年
- 宮治昭「第1章 観音菩薩像の成立と展開—インドを中心に—」『観音菩薩像の成立と展開(シルクロード学研究 vol.11)』シルクロード学研究センター、2001年
- 宮治昭「インドの観音像の展開」『仏教芸術』262号、2002年5月
- 宮治昭『仏像学入門 ほとけたちのルーツを探る』春秋社、2004年
- 森雅秀『インド密教のほとけたち』春秋社、2001年
- 森雅秀「エローラ第11窟、第12窟の菩薩群像」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』27、2007年3月
- 矢口直道「アジャンター後期石窟西群の正面廊僧坊の変遷と開窟順序に関する考察」『岐阜市立女子短期大学紀要』★
- 山田耕二「インドの観音救済図」『仏教芸術』125号、1979年
- 山田耕二「ポストグプタ時代の西インドにおける観音の図像的特徴とその展開—石窟寺院を中心として—」『美術史』106、1979年
- 山田耕二「アジャンターの菩薩像について」『仏教芸術』145号、1983年